
ジャッジメントホリデー

ともみつ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ジャッジメントホリデー

【Nコード】

N3686E

【作者名】

ともみつ

【あらすじ】

日本国における犯罪撲滅を謳う新法。その義務の混乱が徐々に収まりつつある世界。その中で働くリンドールのスタッフたち。彼らが目指すものとは。

プレプロローグ（前書き）

この作品は序盤の今の段階で終了している作品です。

中途半端に感じるかもしれませんが、あとがきをこらんの上、承知して頂けると幸いです。

プレプロローグ

世の中は防犯カメラで溢れている。街路、住宅街の個宅、公共施設、店舗、私設施設、公共機関、タクシー、高速、トイレの出入り口、階段、コンビニ等上げればきりがない。しかし、その全てが常時監視として稼働しているわけじゃない。そうなってしまえば監視員の数だけで膨大な費用が税金から落とされる。そんなものを望む市民は誰一人としていない。しかし、この世界はその考えさえ抱くことのある人間が、今はもう少数派として徐々に平静の世の中へと移ろいつつあった。

かつてのその防犯カメラも、今は審判監視装置と名称が変化し、個人にとつての一週間の確証ある証拠として一週間ごとにリセットされ、消去される。

「つまんねえ世の中だと思わないか？」

かつては防犯カメラ大国と歌われたイギリスも、今ではその座は日本に明け渡している。政府の法案提出後、衆参議会を過半数で可決された新法、休日審判特別法案。犯罪撲滅をスローガンにした通称ジャッジメントホリデー。監視装置による個人の休日までの一週間を、政府特別設置機関である、公安審判機関、これまた通称公審への個人による休日の制定を基盤にした、平日個人行動監視義務の申請及び審判が、無労者及び、高齢者、学生以下は土曜または日曜、勤労者及び個人事業主においては、会社または店舗での休日を申請日とし、その前日までの約一週間の個人の行動の自己申告と、公審による申告書の確認及び審判を行い、申告書に違反通告がない場合は、翌週一週間の申告の免除。公審による審判監視装置による申告書に記された特定場所への移動、行動の審議に申告書との異なる点がある時点で、申告者は地域の公安警察機関または地方公安審判機関への出頭による事情聴取が行われ、明らかな申告書との差異または違反があった場合は、罰金三十万円以上三百万円以下または、禁

固、最悪刑事責任による申告義務違反としての懲役刑が科される。

「まあ、そうよねえ」

法案の可決時には多くの民主党議員等野党による抗議、妨害活動が行われたが、自民党を大多数とする与党は強行として再可決を行い、法案を成立させた。世論の批判の高まりに報道の熱は過熱を辿ったが、政府は、

『申告書の提出に虚偽記載または明らかな欠落が見受けられない限りは、一週間の行動を事細かに書く必要はなく、住基ネットに記載された個人番号を公審機関に申請すれば、審判監視装置による行動申請の詳細の報告開示を行うこととし、就労施設及び教育機関在籍のものは、タイムカードまたは出席簿等による申告を受け付けることとし、不明または忘却した場合は公審による確認を行うこととするため、虚偽及び犯罪行動がなければ、申告すべき事項は日記に記すようなものと同じである』

と、要は犯罪行為や申告ミスについて、その行動内での犯罪行為がなければ日記に一日のことを書き記すことと同じように、その日の行動を申告すれば良いと言った。しかし、報道機関は様々に抵抗を試みた。犯罪行為はともかく、個人での他者へ知られたくない場所への訪問についての、例を挙げれば他人には知られたくないラブホテルへの出入りなどの申告もしなければならぬのかと言ったことや、どの程度の申告が犯罪行為と見なされるのか、など政府の定時会見は連日多くの報道関係者でこった返した。

「毎日毎日大変ですよ。一日の行動なんかいちいち覚えてられるかあつ！　って感じ？」

それでも、法に触れる通常の犯罪行為内での審議とし、初犯に限り酌量の余地として、執行猶予処分も追加で盛り込まれた。名称を知られたくない場合は、その名称ではなく、どの地区でどの程度の間行動していたかを申告すれば、場所の特定などは機密事項として内部処理され、情報漏洩に関しては、独立行政法人として弁護士、検察、警察、機械工学、情報工学、政治家などの厳正なる審査を通

過したその分野に特出した各界人による審査管理機関が新たに設立された。国民による抗議デモも全国各地で繰り広げられたが、政府はその日の行動を書き記し、休日に審査の申告をすれば良いとの一点張りの強情を貫き通し、二〇四六年八月三十一日に法として、日本が新しい情報管理社会の道を動き出したのが、今から十七年前。

「僕、学校だから何もしてないから楽チンだよ」

「おめえは中学だから親がやってくれるから良いんだよ。大人はな、こういう面倒なことを自分でしなきゃならねえんだよ」

昼下がりのカフェ。アイドルタイムの営業はなく、ランチタイム終了と同時に準備中になり、店内には見知った顔が残るだけで静かで穏やかな時間が流れていた。

「良いよねえ、哲ちゃん。あたしも学生時代に戻りたいわあ」

平日だというのに店内には中学生が独りいる。いや、厳密には哲ちゃんと呼ばれている中学生の川上哲也かわかみてつやは本日は日曜日と言うことで休日。今朝公審に先週一週間の行動の申告書を提出し、審査に問題なく通り、来週一週間は申請報告免除となっていた。平日だというの、彼らがいるこのカフェ、リンドールの定休日が毎週火曜と言うことでリンドールのスタッフにとっては平日と言うことが法で定められている。

「私も、二年前が懐かしいな。専門出てからこんなに面倒だなんて思わなかったですよ」

昼休みのまかない待ちをしている哲也の前で同じように待ちながら、やる気なく机に身を投げ出しているのはホールスタッフの一人、天加瀬翠あまかせ みどり、二十四歳。独身彼氏いない歴三年目に突入の、切り替えの早い女の子。そしてその隣でテーブルを拭きながら二年前まで専門学生だったことを思い出して苦笑しているのは、同じくホールスタッフの夏海真奈なつみなな、二十二歳、彼氏いない歴二十二年、趣味愛犬との散歩と料理と言うなかなか家庭的な子。

「お前らなんか良い方だっつーの。俺なんかお前らの出勤簿付けるためだけの講習に毎月行くんだぞ。どれだけ眠いか行ってみるか？」

そして、愚痴を漏らしながらカウンターの水道で食器を洗って拭いている男、大瀬圭樹^{おおせ けいき}、二十九歳、彼女有りのリンドールの経営者。毎月第一金曜日には個人事業主として、公審で行われている出欠勤についての管理責任者として、私情に関係なく勤労の義務の一つとして、従業員の勤労の管理を担うことについての講習会に参加義務があり、よく準備中は愚痴をスタッフに漏らしている。

「お断りい。あたし、事務仕事とか書類とかただ座って話し聞いとると馬鹿になるのお」

翠は、そんなことよりもお腹空いたあと厨房まで聞こえる声で賄いを急かす。親を待つ雛鳥のようだ。

「私もじつとしてるのは苦手じゃないけど、眠くなっちゃいますから」

「俺も俺も」

真奈はやはり苦笑し、哲也も自己主張するように手を上げる。

「おめえは子供だから関係ねえよ。つたく、新規事業主つてのはこれだから辞めちまう奴が多いんだよ」

俺は違うぞ、と愚痴を吐く割には店を畳む気はないらしい。圭樹の言葉に翠の、よつ、男前だとか囁し立てる声が聞こえる。

「そうだろそうだろ。だからお前ら、もっと俺を敬え。俺の苦労を労え」

「じゃあ給料上げてよお。欲しいピアスと指輪あるんだけどさ、たっかいの」

「私は、シヨコラの首輪とお洋服を買ってあげたいかな」

「俺は俺はね……」

圭樹のお調子に三人が給料値上げを訴える。哲也、君は入り浸りのご近所さんじゃないか。

「お前らな……」

三人の調子の良さに圭樹はため息を漏らして、グラスを棚に仕舞った。

「はい、お待ちどうさま。昼ごはんどうぞー」

そして、キッチンで働く俺は圭樹と共にリンドールを立ち上げた
オープニングスタッフとして、今もキッチンのチーフを勤める新海
朔、二十七。圭樹とはカフェの専門学校時代からの親友。ちなみに
彼女は募集中。趣味は細かい作業、料理、パズル、酒集め、散策。

「料理長っ、今日のまかないは何でありますかっ？」

料理長か。いい響きだなあ。調理師免はとってないんだけど。哲
也は中学の坊主のくせに調子に乗せるのだけはうまい奴だな。

「お待たせしました。本日のランチはオマール海老（の昨日の残り
もの）とアスパラと人参（の鮮度悪いからお客様には出せないもの）
のバジル風香草焼きの温玉乗せ特製オリーブソース丼でございます」
たまにはノリに乗ってやることも忘れない。これもスタッフとの
家族のような親しみやすさを作るスキンシップだ。

「うつわ、オマール海老だってっ！……鮮度悪いやつだけど」

「すごおい。さすがですね、朔さん。……ごみ処理を賄いをするな
んて」

「うつまそ。ねえねえ料理長、食って良い？……腹下したら責
任取ってくれるよね？」

うーん、実に連携の取れたウチスタッフと常連君の顔で笑って心
で疑って。涙が出てきそうだ。

「さあ召し上げれ。ちゃんと調理はしてるから一応、食えるぞ。…

…念のため胃腸薬もある」

「お前の本音が一番恐えぞ。……食中毒とかなしだからな」

圭樹だけは本音も建前も同じトーンか。オナーだから責任があ
るのは分かるけど、もう少しノッてくれても良いじゃないか。別に
冗談で通用するだけで、消費期限は大丈夫な残り物の食材なんだか
ら。

「んじゃ、まつ、食うか」

《いっただつきまーす》

全員の声が重なると同時に、ついでに野菜の皮で作った金平も並
べる。すぐにスタッフたちの手が伸びてきてみんなが口々にイケル

と美味しいと言ってくれる。お客様に言われることは当然として、こうしてスタッフにまで喜ばれると、一日の行動申告書に書くことが楽しみになる。何だかんだでかつては批判が続出した審判法も、日記を書く感じで書いても申請は通るから、嫌悪するほどじゃないかもしれない。

「相変わらずさあ、リンドールの賄いつて豪華よねえ」

それは単にその日のお客の入りと予約客との差異によって生じる食材の入荷の保存状況次第。保存の効くものもあれば、今日みたいに保存が効かないものもある。リンドールはディナータイムから予約客の取り込みを行っているおかげで、ディナーに關しての食材はランチタイムとは別格だ。だからたまに賄いがえらく豪華になることがある。圭樹からすれば痛手なんだろうけど、お客様の都合はこちら側からはどうしようもない以上、前週対比からの仕入れの目安をつけるしかない。

「つーかずりい。学校の給食でもこんな美味しいの出来ないし」

当たり前だ。学校の給食に負けてたまるか。懐かしさこそあれど、給食とは格差がある分、美味いに決まってる。美味いように作ってるんだからな。これで給食の方が美味しいと言われたら、俺は店を辞めてやる。

「この為に働いているようなものもありますからね」

そう言ってくれる君がいるから、俺は日々厨房に立てるんだ。とかキザなことを言ってしまうば、馬鹿にされるのが目に見えているからありがとうの一言に変える。

「しかしまあ、そろそろメニューも改変期だ。近いうちに仕入れと打ち合わせに行くぞ」

「ああ。俺も言おうと思ってた」

年中同じメニューだけと言うのは、やはり飽きが来る。味に自信があるからと豪語したところで、お客様の知ったところではない。季節感を大切にし、その季節よりの味を提供することがリンドールのモットーの一つでもある。それに作る側としても同じものだけ作

つても腕が偏るということもある。仕事中の行動申請は内容こそ書く必要はなくても、毎日同じメニューだけを作り、その仕事の時間を書き、申請の確認で毎日同じメニューを実際に作ってました。とか申請許可されるのも何だか沽券に関わるというか、腑に落ちないある意味俺の中では審判制度も仕事への意欲を駆り立てる判断材料に多少なりとも影響しているかもしれない。

「ん？」

「お客様？」

のどかで和やかな休憩時間。それが突然大きな音と共に破られた。申し訳ありません。今は準備中なので……」

誰も席を立とうとせず、視線だけを出入り口に向ける中、真奈ちゃんだけが手馴れたように席を立った。もう少し誰か愛嬌とおもてなしの精神を持って接客をするべきだろう。

「た、助けて下さいっ！」

「へ？」

カウンター近くの席で食べていた俺たちにもはっきりと聞こえる女の子の声。真奈ちゃんの戸惑いの声とは明らかに異なる切迫した声に、圭樹が立ち上がる。

「哲也、事務所行ってスイッチ切つとけ」

「えー？ 何で俺え？ 翠さんパス」

何が起きたのかことを知る手立てはないと言うに、圭樹がそれだけを言い残すと真奈ちゃんの元へ歩み寄った。

「あたし食事中は席立つなって教育受けてんの。だから料理長、ほいパス」

「え？ 俺？ ったくしょうがないな」

この二人はどうもやる気の問題による態度の変化が大きい。かく言う俺も大して人のことは言えないが、一応振る株としての地位がある以上、スイッチを切ると言う行動の責任のことも把握している。

「フォローは頼むよ、二人とも」

「はい」

「任せといてえ」

やれやれ。哲也も翠ももう少し仕事に対する意識の高まりを緊張感で現して欲しいものだ。そう内心でばやきつつ、俺は事務所にあ
る監視装置のスイッチを切りに向かった。そろそろこの手も通用し
ないんじゃないかと疑問に思いながら。

そして、俺たちはリンドールという店のもう一つの顔である、と
ある仕事の依頼を、突然助けを求めてやってきた一人の少女の言葉
から請け負うことになる。次なる相手が、絶対的法の番所であろう
などと知るはずも、この時はなかった。

プレプロローグ（後書き）

拝読ありがとうございました。

中途半端に終わって、何が言いたいのかわからない方が大半だと思いますが、この作品はそれを目的にしていますので、あなたがこれを読んで感じたことを評価欄かコメントにして頂けませんでしょうか？

この作品は、皆さんの意見を参考に制作しようと思っているので、意見ご要望を元にその後の展開を開いていくつもりですので、どうか協力いただけると幸いです。

ジャンルも未確定なので、良いものがあれば意見をくださいます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3686e/>

ジャッジメントホリデー

2010年11月7日08時03分発行